

IV 神話に見る古代史

本稿では、日本に伝わる神話と、考古学的な証拠とを対比して解説してみたいと思います。

西洋の神話を纏めたものが旧約聖書であるように、日本の神話は古事記と日本書紀に収められています。古事記と日本書紀を総称して記紀と呼んでいます。記紀は共に漢字で書かれていますが、古事記は日本人なら誰でも読めるように漢字を音読みした万葉仮名が用いられており、日本書紀は公式記録として外国人が読めるように漢文が使われています。古事記では出来事が完成した一つの物語として紹介されていますが、日本書紀では「一書曰」即ち「一説によれば」と注をつけて、様々な説が併記されているのが特徴です。

神話は古事記・日本書紀共に、国生みの神話から始まります。

古事記によれば天の浮橋から、雲の下に広がる混沌とした下界を見下ろしていたイザナギ・イザナミ命が、矛を下ろしてかき混ぜてから引き上げると、矛の先から滴り落ちた最初の一滴が淡路島、次の一滴が四国、九州、畿内、隠岐、佐渡、北陸、児島半島の大八島になり、飛び散った泡から壱岐、対馬、小豆島などができたと書かれています。

日本書紀では、最初にできたのが淡路島、次が畿内と順番が異なっており、さらに「一書曰」という十の異なったストーリーが併記されています。関東、東北、北海道が含まれていませんが、当時の大和朝廷の統治範囲外であったためと思われる。

イザナギ・イザナミ命の交わりによって海の神、山の神、気の神、草の神などの八百万の神様が生まれました。天の神として生まれたのが天照大神であり、地の神として生まれた須佐之男命は数々の災いをもたらしたとして追放されます。

イザナミ命が火の神を生んだ時に大火傷を負って死に、黄泉の国に行きます。それを追って黄泉の国に行ったイザナギ命は、焼けただれて腐り果てたイザナミ命の姿を見て、必死で逃げ帰ります。怒り狂ったイザナミ命は毎日1000人を殺すことを誓いました。イザナギ命は毎日1500人を生ませると応じました。ここで人間の生死が決まったと言われています。この神話については、日本書紀には「一書曰」という十一の異なったストーリーが併記されています。

須佐之男命の乱暴に怒った天照大神が天の岩戸に隠れたので、世の中は暗闇になりました。八百万の神が集まって相談の結果、鶏を集めて長鳴きをさせたり、鉦や太鼓を打ち鳴らして裸踊りをして、注意を引いて、手力雄神が外に引き出しました。この天の岩戸の物語には三つの異なった話があります。

八岐大蛇は、日本書紀には五つの説が紹介されています。須佐之男命が毎年娘をさらっていく八岐大蛇に酒を飲ませて退治し、その尾から出てきた草薙剣を天照大神に献上するという話ですが、この話には二面性があります。場所は島根県を流れる斐伊川であり、毎年一人の娘が生贄になるというのは、毎年一回は川が氾濫することを意味します。大蛇の血で川が赤く染まったのは、鉄分を含んでいるため、斐伊川の水は赤みを帯びており、尾から剣が出てきたのは、ここが鉄の産地であり剣が作られていたことを意味します。即ち須佐之男命が治水工事と剣の製造を行ったことを意味するとも解されます。

須佐之男命は「八雲立つ 出雲八重垣 妻籠みに 八重垣作る その八重垣を」という詩を詠んでいます。紀貫之はこの詩を日本最初の和歌であると述べていますが、後世の人が作った詩だと片づけてもよいのでしょうか

か。日本の天皇家の伝統として神武天皇を始め歴代の天皇が歌を詠んでいます。これも後世の人の作なのでしょうか。

因幡の白兔、八岐大蛇、海幸彦・山幸彦（浦島伝説）などの神話は、全てその場所が特定されています。

天照大神の代わりに、ニニギ命が三種の神器を持って、日向の高千穂の峰に天孫降臨します。ニニギ命は大山祇命の娘である木花開耶姫と出会い、一目ぼれをして後にしたら一夜で子供が授かりました。不老不死の神であった姉の盤長姫は、自分が選ばれなかったことを恨んで、永遠の命を持っていたニニギ命に人間と同じ寿命を与えました。日本書紀ではこの神話についても八つのストーリーが併記されています。

なお、三種の神器として天皇が代々引き継いできた八坂勾玉、八咫鏡、草薙剣は、現物が熱田神宮と天皇家に保管されてるので、神話として片づけるわけにはいきません。こっそりと中を覗いた天皇はいなかったのでしょうか。

海幸彦、山幸彦の話は、多くの説が入り混じって、遂には豊玉姫が住む竜宮城や浦島伝説にまで発展しています。弟の山幸彦は兄の海幸彦の釣り針を借りて漁に出かけますが、その針を無くしてしまいます。山幸彦が途方に暮れて海辺にいと、老人が現れて、竹の筏を作って山幸彦を乗せて海に浮かべます。海を漂っていると海神の宮に着いて大歓迎を受けて、豊玉姫と交わうと一夜にして子供が授かります。産屋の屋根を吹き上げる前に生まれたので、ウガヤフキアエズ尊と名付けられ、神武天皇の父親に当たります。

ウガヤフキアエズ尊の第四子、彦火火出見（神武天皇）は日向の国を離れて東に進みます。安芸、吉備を経て



難波に達します。難波から生駒山を超えて大和に入ろうとしたとき、ナガスネヒコの反撃にあって兄の五瀬命が戦死します。そこで作戦を変更して、八咫鳥の先導によって和泉から熊野に回って、大和に攻め入ります。この故事に倣って行われるのが熊野詣です。ちなみに五瀬王は、靖国神社の前身である和歌山の龜山神社に葬られました。戦死者を靖国神社に祭るという風習はこの時代からあったのです。

大和を平定した神武天皇は橿原宮で即位をしました。

神武天皇

古事記ではこの年を紀元元年、西暦紀元前660年としています。当時の暦は、四倍暦（春、夏、秋、冬を一年とする暦）二倍暦（春夏、秋冬を一年とする暦）を使っていたため、実際の即位は、西暦150年頃と思われる。

神武天皇は即位に当たって、次のようなお言葉を述べられています。

「国民のために都づくりにとりかかります。この国を授けてくださった神々の徳に答え、先祖が育んだ正しい心を広めていきましょう。その後で国々を束ねて都を作り、一つの家族のように暮らしていける国にしましょう。」新田均 現代語訳

世界に誇れる素晴らしい建国宣言です。神武天皇の墳墓は畝傍山の北東・橿原市洞字にあります。

日本書紀に則って、歴代天皇の業績を記述します。

欠史八代として存在が疑問視されている神武天皇以降の8名の実天皇に関して、その業績についてはあまり触れていませんが、墳墓の所在地や子孫の系図を含めた個人的情報は、記紀に詳しく記載されています。

第10代崇神天皇は都を奈良県桜井市金屋付近の磯城に移しました。この時代に武力で国内を平定して、実質的に大和朝廷を創始したと言われています。崇神天皇の夢枕に現れた大物主命の後の墓が箸墓であると言われる、奈良県桜井市の箸墓古墳は邪馬台国・卑弥呼の墓だという説があります。魏志倭人伝には卑弥呼の墓は直径が100歩という記述があり、橋墓古墳の大きさと一致します。

第11代垂仁天皇代は奈良の玉垣に都を移し、このころから朝鮮半島の任那・新羅との交流が始まります。日本書紀には新羅と交流していた但馬や出石の地名が再三出てきます。なお日本書紀には野見宿禰が相撲で相手を殺したことが書かれています。

景行天皇の皇子である日本武尊命は、東北地方のアイヌの実態を調査し、その後、腰に草薙の剣を刺して、熊襲と蝦夷を平定しましたがその直後に病に倒れました。

第13代成務天皇は武内宿禰を大臣として登用し、国を分割して、県や村、県や村（(邑邑)）を定めました。

第14代仲哀天皇の后が神功皇后です。熊襲を討つ準備をしていたところ、「熊襲を討つよりもその背後にいる新羅を討つべきである」という神の啓示がありましたが、仲哀天皇がそのお告げを無視したので、急に息を引き取りました。

神功皇后は神のお告げに従って新羅を攻めます。新羅は戦わずして降伏、高麗、百済もそれに倣って降伏します。いわゆる三韓征伐です。神功皇后は帰国直後に、後の応神天皇となる皇太子を生みます。皇太子を殺害しようとする勢力から守るために、密かにかに皇太子を敦賀に隠して、皇后自らが強大な権力を掌握して国政を司りました。この時代に新羅が神功皇后に七枝刀と七子鏡を貢いだことが宋書に書かれています。

第15代応神天皇の時代に、新羅、高麗、百済、任那から多くの人々が渡来して、治水事業に携わりました。日本書紀には天皇が淡路島や小豆島や武庫を訪れたことが書かれています。

古墳は地位の高い人がその権力を表す象徴として作られ、前方後円墳や円墳などがあります。ちなみに、大阪羽曳野市には応神天皇陵を含む古市古墳群が残っています。

第16代仁徳天皇は難波・高津に都を移しました。高殿に登ってあたりを見渡すと、民のかまどから煙が上がっていないことに気づき、すべての税金を3年間年間中止し、宮殿の補修も止めました。新羅の人足を使って各



仁徳天皇陵

所で治水事業を行い、大阪湾に注ぐ堀江を作りました。八田皇女を巡って皇后といさかいが起こって、皇后は山城に別居しそこで亡くなりました。長く朝貢を怠っていた新羅を攻め、反乱を起こした蝦夷を平定しました。425年に書かれた宋年には、倭の大王「讚」と記載されています。

仁徳天皇陵はエジプトのクフ王のピラミッド、中国の秦の始皇帝陵と並ぶ世界3大墳墓の一つといわれ、前方後円墳という日本独自の形で、5世紀世紀初頭に築造されたと推定されています。

日本最大の前方後円墳で北側の反正天皇陵古墳((田出井山古墳))、南側の履中天皇陵古墳((石津ヶ丘古墳))と共に百舌鳥耳原三陵と呼ばれ、現在はその中陵・仁徳天皇陵として宮内庁が管理しています。全長約486m、後円部径約249m、高さ約34.8m、前方部幅約307m、高さ約34.9mの規模で3段に築成されています。左右のくびれ部に造出しがあり、三重の濠が巡っていますが、現在の外濠は明治時代に掘り直されたものです。女性頭部像や水鳥、馬、鹿、家など埴輪や須恵器の壺が出土しています。過去に何回か盗掘の被害にあっており、押収された出土品の多くは、アメリカのボストン美術館に保存されています。

最近世界遺産に登録され、部分的な発掘調査が進められています。日本には数多くの天皇や豪族の墳墓があります。すべての墳墓でDNA解析をすることで、神話の世界を現実に引き戻してもらいたいものです。

第17代履中天皇については、434年に書かれた宋書には、倭の大王「珍」と記載されています。允恭天皇は倭の大王「済」と、安康天皇代は「興」と、雄略天皇は「武」記載されています。